

# 脆弱性が明らかになったインバウンド効果と北海道の未来

清末愛砂

新型コロナウイルス感染拡大問題が生じるまで、わたしは毎週のように自宅がある室蘭から特急電車で札幌に行っていた。よく利用する北斗は、函館から札幌を結ぶJR北海道の主要路線の特急であるため、千歳空港や札幌に向かう観光客・出張客で混み合っているのが日常の光景であった。いまでいう、まさに「三密」状態であった。

ルーチン化している札幌行きであることに加え、生来的にのんびりしていることもあり、いつも電車に乗る直前に駅の自動販売機でチケットを購入する。たいがいは「今日も指定席はほぼ満席か。ぎりぎり確保できた」と思いながら料金を払っていたが、中国の連休と重なるようなときは観光客がさらに増加するため、出発直前に指定席を取得できるなんてことは皆無に近かった。

ところが、今年の二月頃から新型コロナウイルス感染拡大防止策の一環として、海外からの観光客の受入れが止まったため、特急電車では一気に空席が目立つようになった。それにともない、外国人観光客が発する中国語の普通語（北京語）の四声が奏でるリズムやタイ語の柔らかい響きに心地よさを感じていたわたしは、なんとも言い難い寂寥感を覚え

るようになった。

かくして、近年の北海道の主要産業の一つである観光業を支えてきたインバウンドの効果が、まったくなくなってしまう。冷え切った観光業を何とか再興させるための施策として導入された「GOTOトラベルキャンペーン」を通して、北海道を含む全国各地で観光客の呼び寄せが行われている。しかし、一〇月中旬以降から新型コロナウイルスの感染者が再度大きく増加し、とりわけ降雪のシーズンに入った北海道（特に人口が集中している札幌）は、過去最多の感染者が出る等、深刻な事態に陥っている。北海道の観光業の目玉の一つがスキー等のウインタースポーツであることを考えると、ニセコをはじめとする海外からの観光客の間で人気が高い地域はこれから来年にかけてさらに追い込まれるかもしれない。

観光業というのは、そのための乱開発が行われたり、観光客の押し寄せ等によりコミュニティの平穏な生活が過度に乱されたりしない限り、基本的に平和的産業である。その意味からも、わたしはインバウンドをポジティブにとらえてきた。また、そうであるからこそ、二〇一五年九月一九日に成立した安保法制および二〇一九年一月一八日に策定され

た新たな防衛大綱の下で自衛隊の演習や日米共同演習がさらに強化されると、北海道の平和的産業にマイナスの影響が及ぶのではないかと懸念してきた。正直に述べると、新型コロナウイルスの感染拡大問題が生じるまで、インバウンドが世界的に大流行する感染症、いわゆるパンデミックにより大打撃を受けるという視点はまったく持ち得ていなかった。いかなれば、脆弱性を見ることに甘さがあったのである。

近い将来という意味では、コロナ禍の収束に関して明るい見通しが立たない現在、インバウンドで盛り上がってきた北海道の産業は、それだけに依拠しない形での観光業のあり方に加え、他の平和的産業の創出を同時に考える必要性に迫られているのではないか。ここであえて「平和的」にこだわるのは、経済的に落ち目になると各自治体が交付金目当てで、ついつい手を伸ばしたくなるような危険な「アメ」が目の前にぶら下がっているからである。その一つが、寿都町や神恵内村の住民を翻弄している核のゴミの最終処分場の建設に関する文献調査問題であろう。住民から未来に対する不安の声が出されるなかで安全性との引き換えともいえるような形で交付金を受け取るうとする、コミュニティの人間関係は壊されていく。一時的なお金に頼るのではなく、各コミュニティで知恵を出し合って持続可能な平和的産業を考える方がより合理的で安全といえるのではないかと思わずにはいられない。

へきやすえ あいさ・室蘭工業大学大学院工学研究科准教授